

# 甘美な音色、柔和な響きで魅了するオーボエ。 バロックから現代まで、多彩な感性を表現。

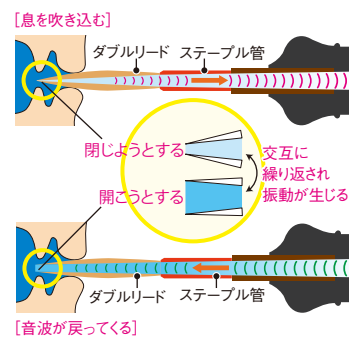
オーボエは全長65~70cmの楽器で、上管、下管、ベルの3つの構造に分かれています。奏者は上管の先端にダブルリードを付け、これをくわえながら上管を左手で、下管を右手で支えて演奏します。音孔は23孔あり、タンポの開閉やキー操作によって音が変わります。またオクターブの上げ下げは、オクターブキーで行います(図1)。

## ダブルリードと細い円錐管が独特の音を生みます。

ダブルリードは、葦の茎で作られた2枚重ねの小さなリードをステープル管(チューブ)という真鍮製の細い円錐管に縛りつけ、これを上管の先端にある穴に、取り付けるといった仕組みになっています。ダブルリードの狭い隙間に勢いよく息を吹き込むと、その息の圧力(吹奏圧)でリードは閉じようとし、リードから管内に向かった空気は音波となり

ベルの方向に進み、管に開けられた音孔やベルで反射。再びリードに戻ってきて、リード内に圧力をかけリードを広げ、口内の息を入れます(図2)。このリードの開閉が繰り返されることで、音が発生するのは、音の発生の際に生じた振動が、管体の空気を共鳴させ、管の外の空気に伝わります。さらに音孔やベルからも放射されて耳に届きます。他の楽器に比べステープル管は細く長いので、流れる息に抵抗を与えることができ、独特の音が生れます。

図2 ダブルリードの音の発生

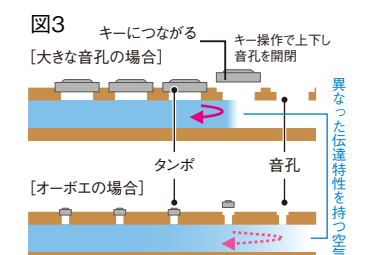


リードは全音域での音程バリエーション、各音高の発音の容易さ、音色の変化の幅など、演奏上の多くに影響を与えます。(そのため、演奏者自身がリードを製作することも多いようです。)

音孔は他の楽器に比べ小さくできています。最も小さいものでは直径1mm未満。小さい穴は、リードから来た音波を確実に反射できず、幾分逃がしてしまいます。このわずかな作用がオーボエ独特の柔らかな音色となります(図3)。

## 同じ音孔を使い、キー操作でオクターブ変化。

オーボエはコーラスやピアノの楽譜通りに読み、演奏できるC管楽器と呼ばれるものです。



最低音b<sup>b</sup>から中音Cまでが基音となり、それより上の音域は各音域に適した各オクターブキーを用いて倍音で音を出します(図4)。安定した音域内では流れるような旋律、スタッカートやプレスト等で分断される動き、分散和音...などを演奏できます。またオーボエは管の長さを調整する必要がなく、よく響くため、オーケストラのチューニングの基準に使われています。管体の材料はグラナディラという木材が一般的。たいへん堅く精密な加工ができ、大きな音量、確実な音程が実現します。リードは昔から葦が使われており、キーは洋白で美しく、音色がよくなるとされる銀メッキが施されています。

## オーボエが活躍する名曲

- P.I.チャイコフスキー:バレエ組曲「白鳥の湖」より「情景」
- W.A.モーツァルト:オーボエ協奏曲 ハ長調 K. 314
- F.ブーランク:オーボエとピアノのためのソナタ

監修: 吉川 茂(工学博士・九州大学大学院 芸術工学研究院元教授)  
古部 賢一(東京音楽大学准教授、新日本フィルハーモニー交響楽団 特任首席オーボエ奏者)



オーボエは2枚のリードを持つダブルリード族の木管楽器です。14~17世紀に野外演奏で多用された、ショームという楽器が原型。室内音楽用に改良されたのは、17世紀後半で宮廷演奏に用いられ、18世紀には室内楽、交響曲、オペラ、さらに宗教曲にと、あらゆる音楽に使われました。19世紀、パリのオーボエ製作者が音孔(管楽器側面に開けられた孔)を整備し、リードを改善。キーシステムを充実させ洗練した音色を実現。パリ音楽院に採用され「コンセルヴァトワール方式」として今日に普及しました。オーボエの名はフランス語のhaut bois「大きく甲高い音の木」からきているようです。オーケストラの重要なメンバーで、ソロでも活躍。中音域から高音域を担当します。